

# アグニの神

芥川龍之介

青空文庫



支那の上海の或町です。昼でも薄暗い或家の二階に、人相の悪い印度人の婆さんが一人、商人らしい一人の亜米利加人と何か頻に話し合っていました。

「実は今度もお婆さんに、占いを頼みに来たのだがね、——」

亜米利加人はそう言いながら、新しい巻煙草へ火をつけました。

「占いですか？ 占いは当分見ないことにしましたよ」

婆さんは嘲るように、じろりと相手の顔を見ました。

「この頃は折角見て上げても、御礼さえ碌にしない人が、多くなって来ましたからね」

「そりや勿論御礼をするよ」

亜米利加人は惜しげもなく、三百弗の小切手を一枚、婆さんの前へ投げてやりました。

「差当りこれだけ取って置くさ。もしお婆さんの占いが当れば、その時は別に御礼をするから、——」

婆さんは三百弗の小切手を見ると、急に愛想がよくなりました。

「こんなに沢山頂いては、反かえつて御氣の毒ですね。——そうして一体又あなたは、何を占つてくれるとおっしゃるんです？」

「私わたしが見て貰もらいたいの、——」

亜米利加人は煙草を啣くわえたなり、狡猾こうかつそうな微笑を浮べました。

「一体日米戦争はいつあるかということなんだ。それさえちゃんとわかっていれば、我々商人は忽たちまちの内に、大金儲おおがねもちけが出来るからね」

「じゃ明日あしたいらつしやい。それまでに占つて置いて上げますから」

「そうか。じゃ間違まちがいのないように、——」

印度人の婆おばさんは、得意とくそうに胸むねを反そらせました。

「私の占うらいは五十年来、一度も外はずれたことはないのですよ。何しろ私のはアグニの神が、御自身御告ごごげをなさるのですからね」

亜米利加人が帰かえつてしまうと、婆おばさんは次の間まの戸口へ行いつて、

「惠蓮えれん。惠蓮」と呼び立てました。

その声に応こたじて出て来たのは、美しい支那人の女の子です。が、何か苦勞でもあるのか、この女の子の下しもぶくれの頬ほおは、まるで蟬せみのような色をしていました。

「何を愚図々々ぐずぐずしているんだえ？　ほんとうにお前位、ずうずうしい女はありやしないよ。きつと又台所で居睡りいねむか何かしていたんだらう？」

恵蓮はいくら叱しかられても、じつと俯向うつむいたまま黙もくっていました。

「よくお聞きよ。今夜は久しぶりにアグニの神へ、御伺ごんがみいを立てるんだからね、そのつもりでいるんだよ」

女の子はまつ黒な婆さんの顔へ、悲しそうな眼を挙げました。

「今夜ですか？」

「今夜の十二時。好いいかえ？　忘れちゃいけないよ」

印度人の婆さんは、脅おどすように指を挙げました。

「又お前がこの間のように、私に世話ばかり焼かせると、今度こそお前の命はないよ。お前なんぞは殺そうと思えば、雛ひよつ仔この頸くびを絞しぼめるより——」

こう言いかけた婆さんは、急に顔をしかめました。ふと相手に気がついて見ると、恵蓮はいつか窓際まどぎわに行つて、丁度明あいていた硝子窓ガラスから、寂さびしい往來なを眺ながめているのです。

「何なにを見ているんだえ？」

恵蓮は愈いよいよ色いろを失うつて、もう一度婆さんの顔を見上げました。

「よし、よし、そう私を莫迦にするんなら、まだお前は痛い目に会い足りないだろう」  
婆さんは眼を怒らせながら、そこにあつた箒をふり上げました。

丁度その途端です。誰か外へ来たと見えて、戸を叩く音が、突然荒々しく聞え始めました。

## 二

その日のかれこれ同じ時刻に、この家の外を通りかかった、年の若い一人の日本人があらります。それがどう思つたのか、二階の窓から顔を出した支那人の女の子を一目見ると、しばらくは呆氣にとられたように、ぼんやり立ちすくんでしまいました。

そこへ又通りかかったのは、年をとつた支那人の人力車夫です。

「おい。おい。あの二階に誰が住んでいるか、お前は知っていないかね？」

日本人はその人力車夫へ、いきなりこう問いかけてました。支那人は楯棒を握つたまま、高い二階を見上げましたが、「あすこですか？ あすこには、何とかいう印度人の婆さんが住んでいます」と、気味悪そうに返事をする、匆々行きそうにするのです。

「まあ、待つてくれ。そうしてその婆さんは、何を商売にしているんだ？」

「占しやい者しやです。が、この近所の噂うわさじや、何でも魔法さえ使うそうです。まあ、命が大事だつたら、あの婆さんの所なぞへは行かない方が好よいようですよ」

支那人の車夫が行つてしまつてから、日本人は腕を組んで、何か考えているようでしたが、やがて決心でもついたので、さつきとその家の中へはいつて行きました。すると突然聞えて来たのは、婆ののしさんの罵る声に交つた、支那人の女の子の泣き声です。日本人はその声を聞くが早いひとまたか、一股ひとまたに二三段ずつ、薄暗い梯子はしごを駈かけ上りました。そうして婆さんの部屋の戸を力一ぱい叩き出しました。

戸は直ぐに開きました。が、日本人が中へはいつて見ると、そこには印度人の婆さんがたつた一人立つてゐるばかり、もう支那人の女の子は、次の間へでも隠れたのか、影も形も見当りません。

「何か御用ですか？」

婆さんはさも疑わしうに、じろじろ相手の顔を見ました。

「お前さんは占しやい者しやだらう？」

日本人は腕を組んだまま、婆さんの顔を睨にらみ返しました。

「そうです」

「じゃ私の用なぞは、聞かなくてもわかっているじゃないか？ 私も一つお前さんの占いを見て貰いにやって来たんだ」

「何を見て上げるんですえ？」

婆さんは益疑ますますわしそうに、日本人の容子ようすを窺うかがっていました。

「私の主人の御嬢さんが、去年の春行方ゆくえ知れずになった。それを一つ見て貰いたいんだが、

——

日本人は一句一句、力を入れて言うのです。

「私の主人は香港ホンコンの日本領事だ。御嬢さんの名は妙子たえこさんとおっしゃる。私は遠藤という書生だが——どうだね？ その御嬢さんはどこにいらつしやる」

遠藤はこう言いながら、上衣うわぎの隠しに手を入れると、一挺ちようのピストルを引き出しました。「この近所にいらつしやりはしないか？ 香港の警察署の調べた所たじや、御嬢さんを攫さらつたのは、印度人らしいということだったが、——隠し立てをすると為ためにならんぞ」

しかし印度人の婆さんは、少しも怖こわがる気色けしきが見えませぬ。見えないどころか唇くちびるには、反って人を莫迦まがにしたような微笑ほころさえ浮べているのです。



「お前さんは何を言うんだえ？ 私はそんな御嬢さんなんぞは、顔を見たこともありやしないよ」

「嘘うそをつけ。今その窓から外を見ていたのは、確たしかに御嬢さんの妙子さんだ」

遠藤は片手にピストルを握ったまま、片手に次の間の戸口を指さしました。

「それでもまだ剛情を張るんなら、あすこにいる支那人をつれて来い」

「あれは私の貰い子だよ」

婆さんはやはり嘲るように、にやにや独ひとり笑っているのです。

「貰い子か貰い子でないか、一目見りやわかることだ。貴様がつれて来なければ、おれがあすこへ行つて見る」

遠藤が次の間へ踏みこもうとすると、咄とつさ嗟に印度人の婆さんは、その戸口に立ち塞ふさがりました。

「ここは私の家うちだよ。見ず知らずのお前さんなんぞに、奥へはいられてたまるものか」

「退どけ。退かないと射殺うちころすぞ」

遠藤はピストルを挙げました。いや、挙げようとしたのです。が、その拍子に婆さんが、鴉からすの啼なくような声を立てたかと思うと、まるで電気に打たれたように、ピストルは手から

落ちてしまいました。これには勇み立った遠藤も、さすがに胆きもをひしがれたのでしよう、ちよいとの間は不思議そうに、あたりを見廻していましたが、忽ち又勇氣をとり直すと、「魔法使め」と罵ののりながら、虎とらのように婆さんへ飛びかかりました。

が、婆さんもさるものです。ひらりと身を躲かわすが早いのか、そこにあつた箒ほうきをとつて、又掴つかみかかろうとする遠藤の顔へ、床ゆかの上の五味ごみを掃きかけました。すると、その五味が皆火花になつて、眼といわず、口といわず、ばらばらと遠藤の顔へ焼きつくのです。

遠藤はとうとうたまり兼ねて、火花の旋つむじ風かぜに追われながら、転ころげるように外へ逃げ出しました。

## 三

その夜よの十二時に近い時分、遠藤は独り婆さんの家の前にたたずみながら、二階の硝子窓ほかけに映る火影くやを口惜あしそうに見つめていました。

「折角御嬢さんの在ありかをつきとめながら、とり戻すことが出来ないのは残念だな。一そ警察へ訴えようか？ いや、いや、支那の警察が手ぬるいことは、香港でもう懲り懲りし

ている。万一今度も逃げられたら、又探するのが一苦労だ。とってあの魔法使には、ピストルさえ役に立たないし、——」

遠藤がそんなことを考えていると、突然高い二階の窓から、ひらひら落ちて来た紙切れがあります。

「おや、紙切れが落ちて来たが、——もしや御嬢さんの手紙じゃないか？」

こう呟いた遠藤は、その紙切れを、拾い上げながらそつと隠した懐中電燈を出して、まん丸な光に照らして見ました。すると果して紙切れの上には、妙子が書いたのに違いない、消えそうな鉛筆の跡があります。

「遠藤サン。コノ家ノ才婆サンハ、恐シイ魔法使デス。時々真夜中ニ私ノ体へ、『アグニ』トイウ印度ノ神ヲ乗り移ラセマス。私ハソノ神ガ乗り移ツテイル間中、死ンダヨウニナツテイルノデス。デスカラドンナ事ガ起ルカ知りマセンガ、何デモ才婆サンノ話デハ、『アグニ』ノ神ガ私ノ口ヲ借りテ、イロイロ予言ヲスルノダソウデス。今夜モ十二時ニハ才婆サンガ又『アグニ』ノ神ヲ乗り移ラセマス。イツモダト私ハ知ラズ知ラズ、氣ガ遠クナツテシマウノデスガ、今夜ハソウナラナイ内ニ、ワザト魔法ニカカツタ真似ヲシマス。ソウ

シテ私ヲ才父様ノ所へ返サナイト『アグニ』ノ神ガ才婆サンノ命ヲトルト言ツテヤリマス。才婆サンハ何ヨリモ『アグニ』ノ神ガ怖こわイノデスカラ、ソレヲ聞ケバキツト私ヲ返スダロウト思イマス。ドウカ明日あしたノ朝モウ一度、才婆サンノ所へ来テ下サイ。コノ計略ノ外ほかニハ才婆サンノ手カラ、逃ゲ出スミチハアリマセン。サヨウナラ」

遠藤は手紙を読み終ると、懐中時計を出して見ました。時計は十二時五分前です。

「もうそろそろ時刻になるな、相手はあんな魔法使だし、御嬢さんはまだ子供だから、余程運が好くないと、——」

遠藤の言葉が終らない内に、もう魔法が始まるのでしよう。今まで明るかった二階の窓は、急にまつ暗くになってしまいました。と同時に不思議な香こうの匂においが、町の敷石にも滲しみみる程、どこからか静しずかに漂ただよって来ました。

#### 四

その時あの印度人の婆さんは、ランプを消した二階の部屋の机に、魔法の書物を拈ひろげな

がら、しきり頻に呪文じゆもんを唱えていました。書物は香炉の火の光に、暗い中でも文字だけは、ぼんやり浮き上らせているのです。

婆さんの前には心配そうな恵蓮が、——いや、支那服を着せられた妙子が、じつと椅子に坐っていました。さつき窓から落した手紙は、無事に遠藤さんの手へはいったであろうか？ あの時往来にいた人影は、確に遠藤さんだと思つたが、もしや人違いではなかつたであろうか？——そう思うと妙子は、いても立つてもいられないような気がして来ます。しかし今うっかりそんな氣けぶりが、婆さんの眼にでも止まつたが最後、この恐しい魔法使いの家から、逃げ出そうという計略は、すぐに見破られてしまうでしょう。ですから妙子は一生懸命に、震える両手を組み合せながら、かねてたくんで置いた通り、アグニの神が乗り移つたように、見せかける時の近づくのを今か今かと待っていました。

婆さんは呪文を唱えてしまうと、今度は妙子をめぐりながら、いろいろな手ぶりを始めました。或時は前へ立つたまま、両手を左右に挙げて見せたり、又或時は後へ来て、まるで眼かくしでもするように、そつと妙子の額の上へ手をかざしたりするのです。もしこの時部屋の外から、誰か婆さんの容子を見ていたとすれば、それはきつと大きなこうもり蝙蝠こうもりが何か、蒼あおしろ白い香炉の火の光の中に、飛びまわつてでもいるように見えたでしょう。

その内に妙子はいつものように、だんだん睡気がきぎして来ました。が、ここで睡ってしまつては、折角の計略にかけることも、出来なくなつてしまふ道理です。そうしてこれが出来なければ、勿論二度とお父さんの所へも、帰れなくなるのに違いありません。

「日本の神々様、どうか私が睡らないように、御守りなすつて下さいまし。その代り私はもう一度、たとい一目でもお父さんの御顔を見ることが出来たなら、すぐに死んでもよろしゅうございます。日本の神々様、どうかお婆さんを欺せるように、御力を御貸し下さいまし」

妙子は何度も心の中に、熱心に祈りを続けました。しかし睡気はおいおいと、強くなつて来るばかりです。と同時に妙子の耳には、丁度銅鑼でも鳴らすような、得体の知れない音楽の音が、かすかに伝わり始めました。これはいつでもアグニの神が、空から降りて来る時に、きつと聞える声なのです。

もうこうなつてはいくら我慢しても、睡らずにいることは出来ません。現に目の前の香炉の火や、印度人の婆さんの姿でさえ、気味の悪い夢が薄れるように、見る見る消え失せてしまふのです。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし」

やがてあの魔法使いが、床の上にひれ伏したまま、噎しわがれた声を挙げた時には、妙子は椅子に坐りながら、殆ほとんど生死も知らないように、いつかもうぐつすり寝入っていました。

## 五

妙子は勿論婆さんも、この魔法を使う所は、誰の眼にも触れないと、思っていたのに違ちがいありません。しかし実際は部屋の外に、もう一人戸の鍵かぎ穴あなから、覗のぞいている男があつたのです。それは一体誰でしょうか？——言うまでもなく、書生の遠藤です。

遠藤は妙子の手紙を見てから、一時は往来に立ったなり、夜明けを待とうかとも思いました。が、お嬢さんの身の上を思うと、どうしてもじつとしてはいられません。そこでとうとう盗ぬすびと人のように、そつと家の中へ忍びこむと、早速この二階の戸口へ来て、さつきから透き見をしていたのです。

しかし透き見をしてみると、何しろ鍵穴を覗くのですから、蒼白い香炉の火の光を浴びた、死人のような妙子の顔が、やつと正面に見えるだけです。その外ほかは机も、魔法の書物も、床にひれ伏した婆さんの姿も、まるで遠藤の眼にははいりません。しかし噎しわがれた

婆さんの声は、手にとるようにはつきり聞えました。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし」

婆さんがこう言つたと思うと、息もしないように坐っていた妙子は、やはり眼をつぶつたまま、突然口を利き始めました。しかもその声がどうしても、妙子のような少女とは思われない、荒々しい男の声なのです。

「いや、おれはお前の願いなぞは聞かない。お前はおれの言いつけに背いて、いつも悪事ばかり働いて来た。おれはもう今夜限り、お前を見捨てようと思つている。いや、その上に悪事の罰を下してやろうと思つている」

婆さんは呆氣にとられたのでしよう。暫くは何とも答えずに、喘ぐような声ばかり立てていました。が、妙子は婆さんに頓着せず、おごそかに話し続けるのです。

「お前は憐れな父親の手から、この女の子を盗んで来た。もし命が惜しかったら、明日とも言わず今夜の内に、早速この女の子を返すが好い」

遠藤は鍵穴に眼を当てたまま、婆さんの答を待つていました。すると婆さんは驚きでもするかと思いの外、憎々しい笑い声を洩らしながら、急に妙子の前へ突つ立ちました。

「人を莫迦にするのも、好い加減におし。お前は私を何だと思つているのだえ。私はまだ



お前に欺される程、もうろく 耄碌はしていない心算だよ。早速お前を父親へ返せ——警察の御役人じゃあるまいし、アグニの神がそんなことを御言いつけになつてたまるものか」

婆さんはどこからとり出したか、眼をつぶつた妙子の顔の先へ、一挺のナイフを突きつけました。

「さあ、正直に白状おし。お前は勿もつたい体なくもアグニの神の、声こわいろ色を使っているのだらう」

さつきから容子を窺つていても、妙子が實際睡っていることは、勿論遠藤にはわかりません。ですから遠藤はこれを見ると、さては計略が露顕したかと思わず胸を躍おどらせました。が、妙子は相変らず目蓋まぶた一つ動かさず、嘲笑あざわらうように答えるのです。

「お前も死に時が近づいたな。おれの声がお前には人間の声に聞えるのか。おれの声は低くとも、天上に燃える炎の声だ。それがお前にはわからないのか。わからなければ、勝手にするが好いい。おれは唯ただお前に尋ねるのだ。すぐにこの女の子を送り返すか、それともおれの言いつけに背くか——」

婆さんはちよいとためらつたようです。が、忽ち勇気をとり直すと、片手にナイフを握りながら、片手に妙子の襟えりがみ髪を掴つかんで、ずるずる手もとへ引き寄せました。

「この阿魔<sup>あま</sup>め。まだ剛情を張る気だな。よし、よし、それなら約束通り、一思いに命をとってやるぞ」

婆さんはナイフを振り上げました。もう一分間遅れても、妙子の命はなくなります。遠藤は咄嗟<sup>とつさ</sup>に身を起すと、錠のかかった入口の戸を無理無体に明けようと思いました。が、戸は容易に破れません。いくら押ししても、叩いても、手の皮が摺<sup>す</sup>り剥<sup>む</sup>けるばかりです。

## 六

その内に部屋の中からは、誰かのわつと叫ぶ声が、突然暗やみに響きました。それから人が床の上へ、倒れる音も聞えたようです。遠藤は殆ど気違いのように、妙子の名前を呼びかけながら、全身の力を肩に集めて、何度も入口の戸へぶつかりました。

板の裂ける音、錠のはね飛ぶ音、——戸はどうとう破れました。しかし肝腎<sup>かんじん</sup>の部屋の中は、まだ香炉に蒼白い火がめらめら燃えているばかり、人氣<sup>ひとけ</sup>のないようにしんとしています。

遠藤はその光を便りに、怯<sup>お</sup>ず怯<sup>お</sup>ずあたりを見廻しました。

するとすぐに眼にはいったのは、やはりじつと椅子にかけた、死人のような妙子です。それが何故か遠藤には、頭に毫光でもかかっているように、厳かな感じを起させました。

「御嬢さん、御嬢さん」

遠藤は椅子へ行くと、妙子の耳もとへ口をつけて、一生懸命に叫び立てました。が、妙子は眼をつぶったなり、何とも口を開きません。

「御嬢さん。しつかりおしなさい。遠藤です」

妙子はやつと夢がさめたように、かすかな眼を開きました。

「遠藤さん？」

「そうです。遠藤です。もう大丈夫ですから、御安心なさい。さあ、早く逃げましょう」  
妙子はまだ夢現のように、弱々しい声を出しました。

「計略は駄目だったわ。つい私が眠ってしまったものだから、——堪忍して頂戴よ」  
「計略が露顕したのは、あなたのせいじゃありませんよ。あなたは私と約束した通り、アグニの神の憑つた真似をやり了せたじゃありませんか？——そんなことはどうしても好いとです。さあ、早く御逃げなさい」

遠藤はもどかしそうに、椅子から妙子を抱き起しました。

「あら、嘘<sup>うそ</sup>。私は眠<sup>う</sup>つてしまったのですもの。どんなことを言ったか、知りはないわ」  
妙子は遠藤の胸に凭<sup>もた</sup>れながら、咳<sup>つぶや</sup>くようにこう言いました。

「計略は駄目だったわ。とても私は逃げられなくつてよ」

「そんなことがあるものですか。私と一しよにいらつしやい。今度しくじつたら大変です」  
「だつてお婆さんがいるでしょう？」

「お婆さん？」

遠藤はもう一度、部屋の中を見廻しました。机の上にはさっきの通り、魔法の書物が開いてある、——その下へ仰<sup>あおむ</sup>向きに倒れているのは、あの印度人の婆さんです。婆さんは意外にも自分の胸へ、自分のナイフを突き立てたまま、血だまりの中に死んでいました。

「お婆さんはどうして？」

「死んでいます」

妙子は遠藤を見上げながら、美しい眉をひそめました。

「私、ちつとも知らなかったわ。お婆さんは遠藤さんが——あなたが殺してしまったの？」

遠藤は婆さんの屍骸<sup>しかい</sup>から、妙子の顔へ眼をやりました。今夜の計略が失敗したことが、

——しかしその為に婆さんも死ねば、妙子も無事に取り返せたことが、——運命の力の不

思議なことが、やっと遠藤にもわかったのは、この瞬間だったのです。

「私が殺したのじやありません。あの婆さんを殺したのは今夜ここへ来たアグニの神です」

遠藤は妙子を抱えたまま、おごそかにこう囁きました。



# 青空文庫情報

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年11月15日発行

1989（平成元）年5月30日46刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2005年1月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# アグニの神

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>